河原枇杷男俳句における認識論と存在論

河原枇杷男は一九三〇年に生まれ、二〇一七年に亡くなった。インターネットのフリー百科事典ウィキペディアによると枇杷男は「一九五四年より永田耕衣に師事し「琴座」同人、一九五八年に高柳重信の「俳句評論」創刊に参加。一九八四年「序曲」を創刊・主宰（一九八九まで）。…（省略）…存在論的な深みを持つ幻想的な句風。句集に『烏宙論』『流灌頂』『蝶座』などがある」とある。

筆者は二〇二〇年一月に枇杷男の句に出会って魅せられ、その冬に『河原枇杷男全句集』（注一）を読み、全句をコンピュータに入力した。魅せられた句の多くは、「我」とは何か、世界とは何かという認識論の句、死とは何かという存在論についての句である。人間の自立、自由、尊厳が脅かされている現代において、枇杷男の句はもっと読まれ、再評価されるべきだと思う。

本稿は、その認識論と存在論という主題と表現方法の変化について論じる。

一　『河原枇杷男全句集』とその分析

（一）全句集の概要

全句集は二〇〇三年九月二三日、兵庫県宝塚市の序曲社で出版された（同前）。この出版社は『蝶座』『喫茶去』を出版した会社だが、住所は枇杷男の自宅と推測される（注二）。

一般に一人の俳人の生涯の俳句をまとめた「全句集」や「俳句集成」は本人の死後、出版社や本人に近しい人によって編まれることが多いが、『河原枇杷男全句集』は俳人本人によって編まれたものである。自ら自分の俳句を終焉させる、言い換えれば俳人としての死を宣告するということは珍しい行為である。刊行後、枇杷男は俳句から離れている。

全句集には第一句集『烏宙論』から未完の『阿吽』まで八句集が収められている。筆者はそれぞれの句集の原典に当たることができなかったため、本論における句はすべて全句集から採っている。

巻末には「覚書」として、各句集の解説が付されている。『烏宙論』（注三）は「前年、審査員吉岡実、塚本邦雄、高柳重信、永田耕衣の推輓を得て、第三回俳句評論賞を受賞、それを機に一九六〇年来の句を纏めて第一句集としたもの」とあり、永田耕衣の序がある。また、『密』（注四）には句集に挿入されて梅原猛の栞文がある（注五）。

枇杷男は、このように華々しいデビューを飾り、二〇〇三年に全句集という事業を成し遂げ、七三歳で俳句人生を終幕

させたが、筆者は、その句の主題が認識論、存在論で、愚直に生真面目に、さらには禁欲的にその道を追究したために、俳人としての死を自ら選択させざるを得なくなったような気がする。

（二）全句集における特徴的な用語

枇杷男俳句の特徴的な用語を左表のように集計してみた。

句集名・刊年 枇杷男は 1930 年生まれ	句数	我	われ	こころ・心	身	わ（我）が・吾	計	蝶	闇	蓬	死	忌
『烏宙論』　1968 年	50	4	3	1	4	0	12（28%）	1	1	1	2	3
『密』　1970 年	50	5	3	4	2	0	14（28%）	2	2	1	3	0
『閻浮堤考』　1971 年	50	2	2	3	1	2	12（24%）	2	2	0	6	4
『流灌頂』　1975 年	70	7	7 （吾 1）	3	1	2	18（26%）	3	4	2	6	3
『訶梨陀夜』　1980 年	80	7	7	2	3	0	21（26%）	7	6	2	6	4
『蝶座』　1987 年	150	9	9	9	6	6	45（30%）	67	0	0	5	7
『喫茶去』　1997 年	130	4	4	3	1	5	27（21%）	4	1	2	1	10
『阿吽』　未完	150	5	5	3	1	2	20（13%）	5	3	0	6	14
『全句集』　2003 年	730	40	41	28	19	16	152（21%）	91	19	8	35	45

表の「計」より左は一人称に関する用語で、、右は採用度が高い用語である。ここでは「死」「忌」、『蝶座』での「蝶」の多さが目立つ。

この表で、枇杷男句においては一人称が多いことがわかる。全句集七三〇句のうち、一人称の句が一五二句、二一％に達する。さらに、一人称に代えて他の名詞を使用することもある。このような一人称の多さは、客観的な数字を示すことは

できないが、一般の俳句における頻度に比べれば、異常に多いと言わざるを得ない。ここに、自分という存在とその認識にこだわった彼の表現方法の一端が表れていると言えるのではないか。

また、俳句での表現は通常一人称であり、ことさらに一人称の主語を用いるべきではないという論もある。しかし、枇杷男には一人称で句を作る必然があったのではないか。〈自分〉がどう認識したのか、〈自分〉の意識のなかにどうとらえたのか、が問題なのだろう。

なお、「私」「わたし」は一句もない。

「死」「忌」が多いのも一人称と無縁ではないだろう。二つの用語は第一句集から採用が多かったが、『喫茶去』『阿吽』では一一句、二〇句と、それぞれの句集の八%、一三%に達している。死、死者へのこだわりも枇杷男句の特徴である。枇杷男はこれらの用語を駆使して存在論的な俳句表現の可能性を追究した俳人であると言えるだろう。

また、表右側の「蝶」「闇」「蓬」は枇杷男句で多く出現する用語で、他に「道」「蛇」「桃」「月」「銀河」などがある。枇杷男はこれらを駆使して幻想的な俳句空間を創造した。

二　枇杷男句における認識論

（一）認識の構造と「我」と「われ」

認識とは、「人間が物事を知る働き及びその内容」（注六）であり、枇杷男が認識したい対象は、死を内包しつつ死に向き合う自分と、自分が認識する世界と、その認識方法だ。

今、仮に「我」を意識において対象を対象化する主体であるとしよう。対象は森羅万象一般であり、「万象一般」には意識における「我」自身や意識下の記憶や感情や欲望や、自分の肉体も含まれる。

そのような意識下の「我」、感情や記憶や欲望や肉体を含んだ人として総体を枇杷男はとくに平仮名の「われ」としているように思われる（「吾」も一句ある）。意識の主体としての「我」に対し、自分が対象化しきれない感情や記憶や欲望や肉体をもった、総合的な自分を「われ」としていると考えられる。意識としての「我」は、「我」自身も、「われ（吾）」をも対象化しようとする。

意識の主体である「我」は自分を意識しようとしても、意識できるのは破片のような、断片的なものだけで、意識させる自分、意識下の自分、感情の自分、記憶の中の自分、さらに欲望する自分、肉体の自分などの「われ」を意識しきることはできない。

このように、「自分」には、意識できる既知の自分、意識しきれぬ未知の自分、意識しえぬ非‐知の自分があるといえ

よう。意識という作用における対象化は、対象化しえたもの、対象化可能なもの、対象化が不可能なものに分析する作業であると言うこともできる（対象化して既知が増しても未知や非‐知が減るわけではない。このことは四（二）で後述する）。いわば、意識は自分自身も、他者も世界も完璧に対象化しつくすことはできない。「我、思う」で問いは終わりにならない。我を「思わせる我」を思う、対象化しようとする。つまり、問いは無限に続く。認識論は絶望的な不可能性に突き当たるのだ。

枇杷男は全句集巻末の「覚書」の『密』の解説において次のように書いている。

《見えざるものは見えるものにおいて現われ、見えるものは見えざるものの他の何ものでもない。「書くとは、開かれた眼と閉じられた眼を同時に所有することであろう」と定本『密』（一九八一年序曲社）の後記に書いている。この生と存在の密、言わばもうひとつの曼荼羅を紡ぎ出すことを夢みていたのであろう。》

文中の「見える」を筆者の用いた「対象化」に置き換えてみていただきたい。

「我」「われ」「吾」の具体例をあげる。

我をもて一行詩とせむ雲に鳥（『蝶座』）

天の川われを追ひくる誰も亡し（『訶梨陀夜』）

蜆蝶なにか呟く吾を過ぎて（『蝶座』）

「我」は「我」自身も、「我」を成り立たせている「われ」も認識しようとする。そのことがうかがえる「我」「われ」が一句に同時に出現する句をあげる。

蓼は穂にわれを探してゐる我も（『烏宙論』）

我とわれすれ違いゆく片かげ（『烏宙論』）

漂へり我よりわれへ鵙ひとつ（『訶梨陀夜』）

総合的な統一体である「われ」が意識の主体である「我」を認識する句もある。

野遊びにわれの見知らぬ我もゐし（『烏宙論』）

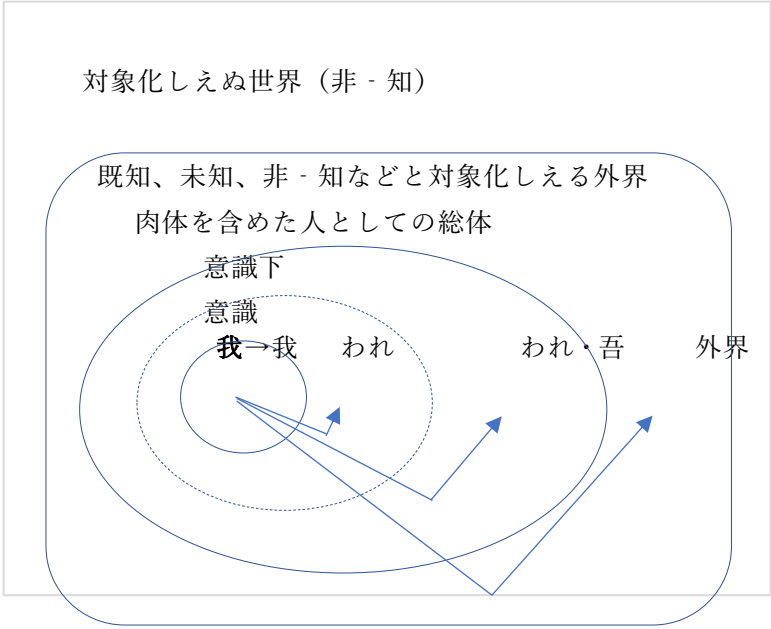
次の句に「われ」は出現していないが、「行く」主体は「われ」で、「我」に会う。

我ばかりに逢ふ蟣蠓（まくなぎ）のなか行けば（『流灌頂』）

さらに、俳句主体は不明だが、その主体が枇杷男本人と出会うという句もある。

亀鳴くや枇杷男氏と又すれ違ひ（『訶梨陀夜』）

試みに枇杷男俳句の認識のあり方を図解すると、左図のようになるだろうか。



（二）多面化し異相化する「我」「われ」

意識の「我」も、「我」に意識され、意識しきれぬ部分をもつ「われ」も一人ではなく、断片的にして、多面体のような性格を持っている。対象化の過程で複数以上の「我」や「われ」「吾」が立ち現れ、異相化するのだ。

枯草に二人の我のひとり棲む　（『密』）

野遊びのふたりは雨の裔ならむ（『流灌頂』）

鯊日和我を無視する我もゐて　（『喫茶去』）

七人のわれ歩きゆく紅蓮かな（『閻浮堤考』）

作句主体が二人で「歩く」のは、死んだ「我」である場合もある。

彼岸花しばらく歩く亡き我と（『喫茶去』）

また、複数以上の自分のなかの一人は体の一部が欠損している場合もある。あたかもそのような絵を描いた現代絵画のフランシス・ベーコン（注七）の絵を見るようだ。

顔の亡きひとりは蓬摘みゐるも（『流灌頂』）

このような表現について松下カロ氏は次のように述べている（注八）。

《河原枇杷男の存在認証（アイデント）は句に偏在する〈われ〉に基づく。彼が求める〈誰か〉はむしろ〈われ〉から始まっている。

天の川われを水より呼びださむ『流灌頂』

菫摘むわれに逢ふこと怖れつつ『訶梨陀夜』

形式とアイテムの接点に釘で打たれたような詠者（われ）がいる。もともと河原が置いた〈われ〉であるが、句内で他の文言と関係を結んだ〈われ〉は、河原が知らない〈誰か〉であった。それは彼を驚かせたことだろう。やがて、河原の〈われ〉は異質な自己即ち別の世界に棲む〈誰か〉を求めて〈我〉を離れてゆく。

我をわれ靡きでて行く枯すすき『烏宙論』

蛾を打つて我ばらばらに毀れける『現代俳句集成』』》

筆者の「我」「われ」の考察において、松下カロ氏の文は参考になるものである。

対象化する主体である「我」は多面化し、かつ異相化した「われ」に向き合い、存在の迷宮の入口に立たされることになる。

（三）一人称が他の用語で出現する場合

一で述べたが、「我」「われ」以外の言葉で、一人称として表現されている場合がある。

「こころ」での句をあげる。

外套やこころの鳥は撃たれしまま（『烏宙論』）

星月夜こころに羽搏つもの棲みて（『蝶座』）

「身」での句をあげる。

身を出でて十薬に跼む暗きもの（『烏宙論』）

身の中のまつ暗がりの蛍狩り（『烏宙論』）

身のなかの逢魔が辻の蛍かな（『閻浮堤考』）

さらに、体の一部を指す名詞も一人称の変形とみなすことができる。

割ってみよや頭蓋のなかは星月夜（『閻浮堤考』）

まなうらに蝮棲むなり石降るなり（『烏宙論』）

てのひらに残る記憶や寒北斗（『閻浮堤考』）

一人称の俳句は『蝶座』で頂点に達し、『喫茶去』で少なくなり、『阿吽』でさらに少なくなる。『蝶座』の場合は「我」「われ」だけでなく、「こころ」「身」を入れ、全体の三〇％に達している。さらに「蝶」を一人称とみなすことができる句もあり、三〇％を越える数字になる。「蝶」を使った句をあげる。

蝶のむれ胸でわけゆく我も夢か（『蝶座』）

蝶の香や言霊あまた国に棲み（『蝶座』）

蝶ときに人の貌する暮の秋（『蝶座』）

三　枇杷男における存在論

古来、文学における最大のテーマは死だ。人はいつ死ぬかわからない、死んだらどうなるのかわからない、いつ病気に

なるか、事故に遭うかわからない。死は生の連続性を一瞬で根こそぎ奪い去る。「我」は死を意識し出せば、安寧を貪ることはできず、常に不安にさらされる。生すなわち存在は不安定なのだ。　枇杷男の認識論は死と近接し、死とは何かを考えることで根源的な存在論となってゆく。

また、枇杷男俳句は「死」「忌」という用語が多い。この二つが出現する句は八〇句。全句集の一一％にあたる。これも他の俳人に比べると異常に多いのではないか。

『現代俳句全集　五』（注九）の「自作ノート」で枇杷男は次のように書いている。

《『密』の書評のなかで「一度死んだ男」のように思えてならぬと、安井浩司さんは、私の正体について疑いをかけ始めている。松田修さんは、『閻浮堤考』を管見して、私のことを「倒懸地獄の紛れもない一人」と書いている」》

枇杷男は自分を死者、あるいは死者のような存在として句に出現させる。

深轍われの忌も過ぎ一月も　（『流灌頂』）

天の川われを水より呼びださん（『流灌頂』）

次の句の「ひとり」は「われ」と読めるだろうか。

枯野来るひとりは嗄れし死者の声（『閻浮堤考』）

枇杷男は前記に続いて「自作ノート」の末尾で次のように書いている。

《人は何処からか来つつある者であると同時に、何処かへ行きつつある者である。（…略…）何処から来て何処へ行くか。そして、この我とは何か。かの風雅な魔神の招きとは、それはまたこの生と存在に対する根源的な問いかけそのものにほかならぬものであろう。書くとは畢竟その問いの淵にひとり佇むことに他ならない。》

また、死という言葉を使わずに死や死の世界について表現した句もある。

元人間かやつり草に跳びつきぬ（『密』）

蓬摘むいつしか亡者に打ちまじり（『喫茶去』）

犬稗は死者のひとりが分からぬまま（『阿吽』）

武良竜彦氏は枇杷男の中心的主題は「死」であると書いている（注一〇）。

《彼の作句法は（略）観念的な主題優先型であり、その中心的主題が「死」だった。／それも実体的な死の表現ではなく、観念としての死の表現だ。死という観念と季語の取り合わせという方法で「反感傷的なかなしみを土壌」とした「不思議な孤独感、あるいは形而上的な感傷」、言い換えれば存在の根源的哀しみのようなものを表現している。》

存在論的な認識の根源には不安と哀しみがあり、尽きせぬ詩想を生み出すのだろう。

なお、忌日に関する俳句は第一句集から作句しているが、しだいに多くなり、『喫茶去』では一〇句、最後の『阿吽』では一四句、一〇％近くに達している。具体的には西行、芭蕉ほか赤黄男、重信、耕衣、芭蕉などである。

赤黄男忌や又物質の一悲鳴（『阿吽』）

耕衣忌や物言いたげに来る蠅も（『阿吽』）

四　認識論を追求する俳句の孤独

（一）時間による孤独

認識とは何か、意識とは何か、意識しきれない意識下にあるものは何か、感情や記憶や欲望、さらには肉体をどうとらえるべきかと考えることは、自己とは何か、人間とは何かと考えることであり、存在を考えることである。認識論は存在論と通底している。

忌わしいのは、意識がその日その時、その場の刹那的、瞬間的なものであるということだ。対象との関係、そのときの感情、肉体の状況など意識をめぐる環境が意識に大きく影響することだ。意識の主体としての「我」はうたかたのようにはかない。また、ヒトは時間的にも変化する。成長し、老いる。

さらに複雑にさせるのは、かつて認識した意識の記憶に現在の意識が対立したり、あるいは疎外されるという事態も起こる。意識すればするほど、存在を考えれば考えるほど、意識の「我」は疎外され、孤独となる。しかし対象化をやめることはできない。それは宿命あるいは業のごときもので、常に敗北感、未完成感に見舞われることになる。

我が敗走わがこころに葛咲きみだれ（『蝶座』）

一つ葉嗅ぐ我にひとりの遍路棲み（『流灌頂』）

意識も感情も肉体も時間が大きな影響を及ぼす。人は時間を逃れることはできない。

わかった、既知になったと思ったものが、やはり違っていた、自分の考え方の進展で変わった、他者の影響で変わった、あるいは科学的な知見で修正したり未知や非知になったりすることもある。あることについて、既知が増えたために、未知があることがわかり、非‐知の存在もわかったということも起きる。知の増加が、同時に、未知と非‐知の増加を招くということもあるのだ。

（二）言葉による孤独

認識は言葉で表現するが、言葉で思想や感情を表現することは大変難しい。言葉はそれを使い育ててきた人々共同のもので、個人のものではない。自分の言葉だと思えても、言葉は他人のものであり、言わば借り物である。自分の意識、感情を現したいと思っても、それに見合う言葉がない

ということもある。言葉は辞典にある言葉しかないのだ。そのなかで満足できなければ、言葉を作るしかない。

また、言葉は一つの字義ではないため、また、文章の流れのなかで複数以上の意味を持つ場合もあるため、発する者の思い通りに相手に伝わらないこともありうる。

言葉を使って表現する者はそのような言葉のあり方に無自覚であってはならない。言葉を無自覚に、全面的に信頼して使うことは、その滑稽と悲惨のなかにいることだ。文学者は言葉に疎外され、ときに言葉に拒絶されつつ言葉を使う者である。文学者は自分の思い、感じた意識、感情を表現するために、比喩や暗喩を駆使し、たとえ話を使ったりするのだ。

比喩などの象徴化は、直接言いたいことを断念することで、仕方ない選択であっても、疎外感に見舞われる。しかし、そのことにより、句は幻想的な世界を構築し、神話化し、詩性を獲得する。詩は疎外と断念の末に、咽びながら叫ぶ、あるいは呟く言葉なのだ。

枇杷男はそれまで一人称を多く使っていたが、『蝶座』においては「蝶」を手にすることによって、その表現の幅を変えた。それまで一人称を使っていた表現を断念し、いわばわかりやすさを捨て、象徴化、場合によっては神話化を図ることによって、詩性の獲得をめざしたのではないだろうか。

このことは枇杷男の俳句をさらにわかりにくくし、深淵を深め、迷宮性を高めているが、そのことで、他者、社会に疎外される思い、孤独感を強くしたことも推測できる。

「我」や「われ」など一人称を省略しつつ、内的世界を表現したと思われる句をあげる。

或る闇は蟲の形をして哭けり（『密』）

この句では「闇」自身を句の主体に置いている。「我」は「闇」になっているか。

月天心家のなかまで真葛原（『流灌頂』）

「家」は作句主体の「我」の家、すなわち意識ということになろうか。月は意識の真葛原を煌々と照らしている。

誰かまた銀河に溺るる一悲鳴（『蝶座』）

句の主体は「誰か」で、銀河で悲鳴を上げている。しかし、「誰か」は枇杷男だ。枇杷男の「我」だろう。

以上の三句は、現実世界の現象としては成り立たず、頭のなかでの世界である。枇杷男句を知っている人は枇杷男の内的世界ととらえるかもしれないが、そうでない人には文としても俳句としても破綻していると思うかもしれない。しかし、神話的世界を構築できているとも言える。そこに枇杷男の、否、詩人の苦悩、疎外感と孤独感がある。

『蝶座』には次のような句がある。

蛇苺われも喩として在る如し　（『蝶座』）

ついに、自分自身は、多面化し異相化したいろいろな自分

から成る他人のようになってしまい、実体のない「喩」のごとき幻想の中に紛れ込んでしまうのだ。言葉の限界性を引き受けつつ五七五に賭けた枇杷男の壮絶な俳人としての在りようを思う。

五　断念の美学という終幕

一（一）で、枇杷男は錚々たる人たちに認められて第一、第二句集を刊行したことを書いた。二〇〇三年に全句集を刊行した後の二〇〇八年には正岡子規国際俳句賞の俳句賞を受賞している（大賞は金子兜太）。

しかし、国立国会図書館の所蔵資料を調べると、『俳句研究』（注一一）には数号あるものの、全国的な句誌への登場は少ない。枇杷男句のように抽象度が高く、難解に見える句は、多くの読者の共感を得られにくいと考えられるのだろう。ただ、『俳句』第二八巻第六号（注一二）は「特集・現代の俳人」として枇杷男を取り上げ、新作二〇句、アフォリズム集「葉」、自選百句を載せ、松田修、安井浩司、伊吹夏生、今坂柳二、林桂が枇杷男論を寄せている。

アフォリズムを四つ紹介する。

「五　視るということに疑いをもつことなくして、真に視るということなど始まりはしない」　「九　視えざるものは、視えるものにおいて現われる。視えるものは視えざるものの他の何ものでもない。」　「一五　この生と存在の淵より掬いあげて、何を視たと言うべきであろうか。幻を視ることの他に俳句形式に遊ぶ如何なる栄華があろう。」　「一七　人間は、必ず死ぬことがわかっているにもかかわらず生きる。それだけでも、人間は悪魔のようであり、天使のようでもある。」

第三句集以後、枇杷男の理解者や友人はいたのだろうか。『現代俳句全集　五』（注九）に「枇杷男の美学」を書いた吉岡実、この項目のあとで出てくる大岡信などは理解者であったが、俳人で友人を公言していたのは安井浩司で、枇杷男の名前を入れた句も作っている（注一三）。枇杷男は目にしたのだろうか。

枇杷男かと柩ひらけば蝶ばかり
河原枇杷男宇宙の草と成りおらん

安井浩司は二〇二二年一月に逝去したが、熱心な後輩たちが三冊の本を作った。そのなかの一冊『安井浩司読本Ⅰ―安井浩司による安井浩司』（注一四）には安井へのインタビューにおいて、安井がアルバムを持ってきて、次のように語ったという。

「この写真は昭和四十三年（一九六八年）五月に撮影したも

ので、左から私、大岡君、それに河原枇杷男です。私は加藤郁乎以降の戦後の俳句を、この三人で支えてきたと思っています。枇杷男の家の前で撮った写真で、大岡君と私で枇杷男の家に泊まったんです」（筆者注：「大岡君」は大岡頌司）

同書巻末「安井浩司自筆年譜」では、一九六八年から一九七六年にかけて、浩司が枇杷男宅に三度宿泊、枇杷男も浩司宅に一度宿泊、一度来訪（と記載）、東京の会合で二度会い、一九七二年には「昨年春より枇杷男よりＴｅｌがしばしば。こちらも負けずにかけるのでＴｅｌ代高し。」と記載されている。浩司は枇杷男の六歳下である。

このような交友があっても枇杷男は自分から俳句をやめた。それは何故か、枇杷男は語らない。しかし、最後の句集である『阿吽』では、密教的な影が増すとともに、俳句への訣別を匂わせる句がある。いくつかあるが、三句あげる。一つは忌日句でもある。

この寂しさ俳句のごとし潮干狩

重信忌俳句にも飽き我にも亦

俳句ちふ淵や在るらし星の秋

また、これまでの枇杷男句に見られなかった人生を感慨する句もある。しかし、これらは枇杷男句の結晶度の高い硬質な俳句の域に達しているとは言えないように思われる。

濁世の灯恋しと来しやげじげじも

冬に入る銀漢われを糺すかに

風花曰く時代はつねに淋しきと

そして、二〇〇三年の『河原枇杷男全句集』で俳句の活動を終焉させた。枇杷男はこの句集内の「覺書」で次のように述べている。

《……この一巻は歩みの果てに否応なく見出される己れの墓碑でもあろう。ここに到って思われるのは、今日までに享けてきた恩顧のかずかずである。その思い出のなかから「写実写生句のはるか遠方を歩み、人間のもつ謎の世界に存在論的にせまる作風を特徴として」（大岡信『百人百句』講談社）「独特な内部宇宙ともいうべき世界を切り拓いてきた人」（大岡信『名句歌ごよみ〔秋〕』角川文庫）の端的を恰好の墓碑銘として顧みつつ、幕をおろすことにしたい。》

自分で墓碑を建てて終幕する、これは美学と言うほかはない。枇杷男は、認識論、存在論の句を孤独と疎外感のうちに作り続け、ある種の限界とやりきったという感覚を感じるとともに、人間として、俳人としての疲労を感じ、俳句から距離を置いたのではないか。

角川書店の『俳句年鑑』二〇〇一年版（注二）には「二〇〇〇年諸家自選五句」に句を寄せ、「全国俳人住所録」にも氏名、住所等が掲載されているが、二〇〇二年版（注一五）

には住所録には記載はあるが、句は寄せていない。二〇〇一年版に掲載された五句の最後の句は先にあげた『阿吽』の句である。

俳句ちふ淵や在るらし星の秋

六　結語―不可能性の彼岸へ

彼は二〇〇三年、七三歳で沈黙し、二〇一七年まで生きた。彼はどのような思いで、自分の句や俳句界を見つめていたのだろう。

筆者は枇杷男の死を二〇二二年三月に知った。それまで存命だと思っていたが、東京新聞の「外山一機の俳句のまなざし」という月一度の連載（注一六）の「遠くを見据えた2人」という記事で、外山は、同年一月の安井浩司と二〇一七年の河原枇杷男の死を伝えていた。その記事から『鬣』第八二号（注一七）の鬣の会会長、林桂の追悼記事「追悼・河原枇杷男―究極の一句へ」を知った。読むと、整理を委託された司法書士事務所からの『鬣』寄贈中止の依頼で「平成二九年逝去の詳細は仕事上ご遺族の了解なく教えることはできないということであった」そうだ。さらに、鬣の会は『鬣』第八五号（注一八）において「河原枇杷男を読む」という特集を組んでいる。

筆者は二〇一四年に俳句をはじめ、二〇一八年に現代俳句に転向、二〇二〇年に枇杷男を知った。枇杷男を知る前から、我とは何か、世界とは何かというような句を作ってきた。枇杷男を知って師を得たように思い、会いたいと思った。しかし、そのときすでに彼はこの世にはいなかった。もう少し早く、俳句を始め、枇杷男を知っていたらと思う。

枇杷男は、我とは何か、意識とは、さらに世界とは、死とは何か問い、認識論と存在論を追究し続け、果てた。

野菊まで行くに四五人斃れけり（『烏宙論』）

「野菊」は何の象徴だろうか。到達することのできない非‐知という不可能性の彼岸だろうか。たとえ、そうであっても、死という非‐知を内包する存在の対象化という認識行為をやめることができない「四五人」のなかに枇杷男はいる。否、「四五人」はすべて枇杷男なのだ。枇杷男のA、B，C、D、Eなのだ。そして、筆者もそのなかの一人でありたいと思う。

（了）

【注】

一　河原枇杷男著『河原枇杷男全句集』宝塚市　序曲社　二〇〇三年

二　『俳句年鑑二〇〇一年版』(角川書店　二〇〇一年一月)

の「全国俳人住所録」における枇杷男の住所と同じ。
三　『烏宙論』俳句評論社　一九六八年
四　『密』白桃社　一九七〇年。
五　全句集巻末「覚書」に紹介されている『密』栞文の梅原猛の文章
《不思議な世界がそこにある。河原枇杷男は一つの世界をつくった。そして一つの世界をもつ作家や詩人や思想家が現在いかに少ないことか。私は河原枇杷男の世界創造を祝福したい》
六　『広辞苑』第七版 岩波書店 二〇一八年
七　フランシス・ベーコン　一九〇九年～一九九二年　アイルランド生まれのイギリス人画家
八　『女神たち　神馬たち　少女たち』松下カロ著　深夜叢書社　二〇一六年
九　『現代俳句全集　五』立風書房　一九七八年
一〇　武良竜彦「河原枇杷男句集考 - 答えのない存在の問い」ブログ『武良竜彦　俳句のページ』
一一　『俳句研究』は一九三四年に改造社で刊行、一九四四年から目黒書店、巣枝堂書店、一九五二年から俳句研究社、一九八六年から富士見書房、二〇〇七年から角川ＳＳコミュニケーションズ、二〇一一年に終刊。
一二　『俳句』第二八巻第六号　角川書店　一九七〇年
一三　『句集　空なる芭蕉』　安井浩司著　沖積舎　二〇一〇年
一四　『安井浩司読本Ⅰ　安井浩司による安井浩司』　酒巻英一郎ほか編　金魚屋プレス日本版　二〇二二年
一五　『俳句年鑑』二〇〇二年版　角川書店　二〇〇二年
一六　東京新聞二〇二二年三月一九日夕刊　外山一機「遠くを見据えた2人」
一七　『鬣』第八二号　前橋市　鬣の会　二〇二二年
一八　『鬣』第八五号　前橋市　鬣の会　二〇二二年

【注以外の参考文献】

○『昭和俳句作品年表』現代俳句協会編刊二〇一七年　川名大「戦後俳句の展望―「近代」と「反近代」の諸相」
○『俳句・彼方への現在』林桂著　詩学社　二〇〇四年「河原枇杷男の現在」
○ウェブ『総合文学ウェブ情報誌　文学金魚』田沼泰彦「No.002 河原枇杷男」　二〇一二年
○『俳句研究』第三七巻一〇号　河原枇杷男　「俳句における新しい古典主義」
○『俳句研究』第三八巻一〇号　中村苑子　書評『閻浮堤考』
○『俳句研究』第四八巻九号　河原枇杷男　「安井浩司」
○『俳句研究』第五一巻四号　大庭紫逢　「みな生きすぎし」
○『安井浩司読本Ⅱ　諸氏百家による安井浩司論』酒巻英一郎ほか編　金魚屋プレス日本版　二〇〇二年